第 7 回国際日本学コンソーシアム「多文化共生社会に向けて」
2012 年 12 月 17・18 日　於：お茶の水女子大学

女性の自伝的作品における追憶の方法
―『蜻蛉日記』と「金石録後序」を中心に

お茶の水女子大学大学院生　　施 旻

平安時代の女性の日記文学は「日記」と名づけられながら、作者が人生のある時点に過去の生涯を振返って書き記すという形をとっている。とり扱われた年代や時期、作者の立場がそれぞれ違うけれども、体験なるものを回想によって連続の相において捉えようとすることはどの作品にも共通している。その系譜の作品の嚆矢とされる『蜻蛉日記』は、作者道綱母は自らの二十一年間の結婚生活を回顧し、夫兼家に対する執着、それが受け入れられないため生じた不安、不満などの感情を綿々と書き続け、人々に示して見せようという意図を明らかに表していることから、世界中でも自伝的作品の早い例として注目されている。

一方、中国の十三世紀（宋代）までの自伝的文学は、作品数そのものが少ない上に、女性の書いたものがほとんど存在しない点において平安時代の日記文学とは対蹠的である。本発表はその文学状況を概観するうえで、南宋の著名な女詞人李清照の「『金石録』後序」という自叙的散文作品を取り上げ、『蜻蛉日記』との比較を試みる。両作品の相違点並びにその相違点をもたらした原因について考察する。

既に指摘されているように、平安時代には読み書きする女性が層をなして存在していた。彼女たちが文学の創作、享受、流布に深く関わっていたからこそ、今日でも平安女性の作品が数多く残っているのである。それに対して、中国宋代までの著作に関わる女性を探ってみると、詩に優れた女性、女訓書を著す女性などの存在は知られるものの、その作品の大部分は散逸し、女性作家は見過ごされてもおかしくないほどにごく小さな一角しか占めていないのが現実である。このように異なる文化的歴史的背景に、道綱母と李清照は夫との関係を中心に自らの半生を如何に回想して書き綴ったのかについて検討してみたい。本発表では両作品の外的状況の大きな相違と、それにもかかわらず追憶を表現する方法の共通性が見られることを明らかにし、女性の自伝的作品の本質について考察してみたい。